命短し恋せよ召喚術師（サモナー）

白ノ兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは主人公の召喚術士雛沢可憐が異能学校華菊学園で恋したりバトったりテストに苦戦したりしながら頑張る物語である。

目次

プロローグ　私雛沢可憐の場合 ―― 1
第２話クラスメイト ―― 4
第３話自己紹介！ ―― 8
第４話異能戦 ―― 12
第５話霧の幻影 ―― 18
第６話図書室での出会い！ ―― 22
第７話　再びヤンキー先輩！ ―― 26
第８話　職員室！ ―― 30
第９話隠し部屋と上級生達 ―― 36
第１０話確認と上級生の力① ―― 42

プロローグ　私雛沢可憐の場合

　これは主人公の召喚術士雛沢可憐が異能学校華菊学園で恋したりバトったりテストに苦戦したりしながら頑張る物語である。

「私雛沢可憐！今日からここ華菊学園に通う普通の中学一年生！私はこの学園でたーっくさん友達を作ったり恋したり勉強に苦戦しながら煌めく学園生活を頑張るぞー「邪魔だどけ」って痛ッ!?」

（と私が心の中で自己紹介していたら目つきの悪い男が背後からぶつかってきました）

「いや普通に声に出てたからな、それと悪かったな目つきが悪くて」

　なっ！心を読まれたですと!?

「謝るならぶつかったことに対して謝ってくださいよ～！」

　私が両手をブンブン回してるとぶつかってきた目つきの悪い人は余計目付きを悪くして。

「お前が廊下の真ん中に突っ立てるのが悪いんだろ?、あと初対面の先輩に対して馴れ馴れしくないか…」

「え?先輩?ここ一年生フロアですよ?」

そう、ここは一年生フロア特に先輩達が近づく理由も特に無い…はず多分。
「この奥に校長室と職員室前があるんだ、そんなことも知らねぇのか？」
「あ…ああ～ありましたね！あはは～」
訂正校長室と職員室がありましたね。
「なんだこいつ（まあ、まだ初日だしな忘れてても無理はないか）」
「先輩!?健全と逆ですよ!?」
「ってこんな奴に構ってる余裕は無かったんだじゃあな」
「ちょっ、ちょっと待ってくださいよ！」
そう言ってこの場を離れようとするヤンキー先輩（私命名）を私は引き止めました。
「……なんだよ」
「あらかさまに嫌そうな顔をしないでください!?えーっともしかしたらこれは運命の出会いかもしれないので名前を教えてくださいませんか？」
そう！入学初日にファーストコンタクトを取った先輩きっとこの６年間でお世話になるはず！美少女＋上目遣いの魔のコンボの前では誰もＮＯを言えない！
「なんだよ運命の出会いって頭沸いてるのか？」
あ、頭湧いてる!?酷い…
「嫌だ、って言ったら付きまとわれそうだし仕方ねえか鬼凛寺涼ここの中等部３年だ」

「ありがとうございます私は「雛沢可憐だろ」言わせてくださいよ!?」
「知らねぇ、もう合わないことを祈っとくぜ」
「それは私がこの学園にいる間は厳しいのでは?」
「おい、急に真面目になるなよ、ったくじゃあな見かけても俺にはもう関わってくるなよ」
「わかりました見かけたら沢山関わりますね!」
「それはわかりましたとは言わねえよ」
(これが私雛沢可憐と口が悪く見た目も怖いけど頼れる鬼凛寺先輩のファーストコンタクトでした)

つづく

第２話クラスメイト

「さあ着きましたマイクラス！さてどんな出会いが私を待ってるんでしょうか私興奮が止まりません！」

息を荒らげ目ギラギラさせているその少女は完全に不審者だった。

「じゃあオープン！」

笑顔でドアを開けて入った可憐の頭に――

ぽふんっ

「え？」

黒板消しが落ちた。

「……ぷっ」

「え？」

「ぷはははｗｗｗ」

１人、この広い教室の中でただ１人ゲラゲラ笑っている少年が居た、その少年は青いショートで猫目なイケメンだったがゲラゲラ笑っているその姿からは幼さが見えまさに美少年という存在だったが

「……（プルプル）」
「あれ？怒った？怒っちゃった？ごめんね～まさかあんな幼稚な罠に引っかかる人がいるとは思わなくて～笑いを堪えられなかったんだよね～」
「……（プチン）」
「あっ（察し）」
　生徒の1人がこの後の展開を読めたようだ。
「黒板消しを仕込んだのあんた？」
　可憐が猫目の少年に笑みを浮かべながら聞いた。
「ん？そうだよ（笑）この学校に黒板が無いからわざわざ買ってきたんだよ～？懐は痛かったけどいや～ここまで笑えたからプラスだね！」
「あっそう…ルナ!!!」
　可憐は自分の召喚獣を叫んで呼んだ、するとウサギと人の子供をを足して割ったような容姿の召喚獣が現れた。
「あの女召喚術士かよ!?」
「やべえじゃんてか能力を使った喧嘩ってダメじゃなかったか？」
　教室がガヤガヤしだした。
「あれ？怒っちゃった？」

それでも少年は余裕そうだ。
「寝てろこのアホォォォォ!!!!!」
その叫びを合図にウサギの召喚獣ルナは横の黒板消しを少年の頭にぶつけるために蹴っとばした。
「ありゃ？」
豪速球で頭に飛んでくる黒板消しを少年は。
「ん～カモンチェシャ猫」
それを合図に猫の召喚獣が少年の肩に現れ黒板消しをパンチでは叩き落とした。
「なっ!?」
「いやいや何驚いてるのさこの程度なら普通の人間ならともかく召喚獣なら朝飯前だよ？」
「貴方召喚術士だったの？」
「ふふん？」
（うわぁドヤ顔うざっ！）
召喚士は術士の中でもレアな部類だまさかこのいけ好かないアホも召喚術士だったとは。
「まあまあそう睨まないでよ黒板消しは単なる挨拶さこれをきっかけに僕達接点が出来

たでしょ？ある意味運命だと思わない？」
「何が運命よ頭イカれてるんじゃないの？」
そう言ってべーと舌を出した。
「あはは、さっきといいキミ面白いね名前なんて言うの？」
「……雛沢可憐」
「可憐ちゃんね～僕は鷹森歩よろしくね可憐ちゃん？」
（ぜっっったいに嫌だ！）
喉まで出かけたその言葉を飲み込み私は自分の席に着くのであった。

第３話自己紹介！

「初めまして皆さん今日からここのクラスの担当になる山崎美穂と申しますよろしくお願いしますでは最初に皆さんに自己紹介をしてもらいましょうかでは右からどうぞ」
「はい！荒川千乃です異能は――以下略」
「黒石和真由里ですわ異能はまあ、氷系統とだけ言いましょうか皆さんよろしくお願いしますね？」
「以下略」
「鷹森歩だよ～異能はまあ想像におまかせしまーす☆」
「いや…召喚術師だろ」
「以下略」
「以下略」
（ついに来た！）
「雛沢可憐です！好きな食べ物はマカロンで嫌いな食べ物はパセリです召喚術士で異能名は月の女神！恋に青春に頑張ります！よろしくお願いします！」
（決まった！）

「「……」」
「あれ？」
　もしかして…
（滑ったー!!!!）
「いや～当たり前でしょ恋に青春に頑張ります（きゅるるん）ってどこの少女漫画のキャラなの？」
「グサッ！」
「はぁ…希少な召喚術士の片方がこんなのだなんて才能の持ち腐れですわね」
「そ、そんなこと言わなくてもいいでしょ!?」
「わかってないなら言いますが力を持つものがそんな知性の欠けらも無いような幼稚な印象を与えたら舐められるのは貴女だけじゃないんですよ？」
「うっ…」
　他の人に迷惑をかけるのを想像して少し。
「ふん、わかったならもう少し品を持って振る舞いなさい」
「わ、わかりました…」
「あらら～撃沈しちゃった～」
「貴方もですよ鷹森くん先程の件は優雅とは言えないのはなくて？」

「ああ僕はそういうのいいから別に他の人がどう思おうが僕の勝手だしにゃ～」
　うわっ完全に黒石和さんを舐め腐っているじゃん。
「貴方は本当に人をイラつかせるのが得意なようですね鷹森歩」
「いや～褒めてもなんにも出ないよ？黒石和真由里ちゃん？」
（うわぁ…めちゃくちゃバチバチしてる）
「コホンッ茶番はもう終わりましたか黒石和さんと鷹森さん？」
「ちゃっ…申し訳ございません黙ります」
「～♪」
「鷹森さんは少しは反省の色を見せてくださいね」
「はーい♪」
「あと雛沢さん先程の自己紹介別に私は嫌いでは無いですから落ち込まないで頑張って下さいね」
「わ、わかりました…」
　先生…そのフォローが傷に響きます。
「では生徒会長と校長先生の話がありますから移動しましょうか」
「「はーい」」
（うう～失敗しちゃったよ～やっぱりダメだったのかな…）

先生がフォローしてくれたがそれでも気分は落ち込んだままでそして雛沢可憐はモヤモヤした憂鬱な気持ちで体育館に向かった。

第４話異能戦

「終わったー！」

長い生徒会長や校長の話が終わり体育館から帰った可憐の肩に手を置いた人物が居た。

「…手をどかしてくれないかな鷹森くん」

「ええーいいじゃん僕達の仲でしょ？」

「貴方と友達になった覚えはないんだけど」

「え？」

「え？じゃないよ！むしろよく友達だと思っていたね!?」

「いや～なんか親しみやすかったから友達でいいかなって」

「私は貴方に親しみやすさを感じてないんですがそれは？」

「あまり考えすぎない方がいいよ？」

「さいですか！」

「ところで可憐ちゃんこの後ペアでの異能練習でしょ？僕と組まない？」

「嫌だ」

「即答!?でも可憐ちゃん組めるほど仲のいい人クラスにいないでしょ?」
「……」
「僕と組もう?」
「わかりました」
「ええ!?可憐ちゃん凄い顔してるよ?そんなに僕と組むの嫌だったの?」
「当たり前でしょ」
「なんで?」
「生理的嫌悪感があるから」
「わぁおたった数回の会話で僕も嫌われたね」
「笑いながら言うことではないと思うんですが」
「まあまあとりあえず組むことは決定ね〜先行ってるね〜」
そう言って鷹森くんは走っていった。
「……疲れたな…」
想像していた学園生活が音を立てて崩れていく音を聞きながら一筋の涙が流れた。
〜異能格闘場〜
「はい皆さんここは異能を解放していい数あるひとつですここで異能を解放すると自動で皆さんの体に膜状のバリアーが貼られますバリアーにはライフがありライフが無く

なると自動的に外に転送されるので安心して異能を使ってくださいね」
「よしやろうか雛沢さん」
「分かりましたよ…はぁ…」
「そういえば雛沢さん僕に対して敬語だよね？同級生だしタメでいいよ？」
「いや結構です、なんか負けた気になりそうですし」
「そう？まあいっかじゃあ始めようか」
「そうですねぶっ飛ばしてやりますよ」
　私が睨みつけるも鷹森くんはどこ吹く風だ、そのスカした顔に1発入れてやる。
「来てルナ」
「カモン、チェシャ猫」
　2人同時に呼び出したが先制攻撃をしかけたのは可憐のルナだった
「おりゃー！」
　可憐の掛け声と同時にルナがハイキックをかました…が瞬間間に入った鷹森くんに蹴り飛ばされた。
「はあ?」
「ん？どうしたの？もしかして召喚術士が乱入してきて驚いた感じかな～だとしたら可憐ちゃん甘いね～召喚術士もプレイヤーなんだよ？確かに召喚獣は人間よりかなり身

体能力は高いけど身体強化をつかえれば倒すことは出来なくても対処出来ないこともないんだよね～」

　鷹森くんはヘラヘラ笑いながら説明してくれた。

「…召喚術士は召喚獣を使っていかに召喚術士を守りながら戦えるかが鍵になるって小学校では言ってましたよそれじゃあ弱点を晒してるだけじゃないですか？」

「はあ…可憐ちゃんまだ小学校の教育を真に受けてるの？」

「え？いやいや活躍している召喚術士もそうやってるでしょ!?」

「確かにそうだけどテレビに出ているのは3流良くて2流の奴らだけだよ？ぶっちゃけあれはスポーツとして成り立ってる戦い方だから実践では使えないよ～」

「ちょっと待って実践って何？」

「あっ…口が滑った」

「……」

「……」

「忘れて☆」

「いや無理です」

（何実践ってなにやらされるの!?）

「わかったわかった言いたいこともわかるよ？だったらこうしようかこの練習で僕に一

撃でも与えられたら教えてあげるよ～」
「言いましたね？1発と言わず何発でも顔面にぶち込んでやりますよ」
「相変わらずバイオレンスだね可憐ちゃんは～」
　私はルナを手元に戻し1人と1匹を見つめた。
（相手の戦力は前衛チェシャ猫と後衛鷹森くんのペア対し私の戦力はルナ1匹のみ身体強化が使えない私が加勢しても負け戦になるだけだからと言ってルナだけに任せても2対1は不利ここは――）
「作戦は決まったかい可憐ちゃん？」
「待ってくれてありがとうございます決まりましたよだから気軽に負けてください」
「第2ラウンドだね」
「違いますよ最終ラウンドです！」
　そう言って私とルナは同時に走り出した。
「ん？予想とは違うな～まっいっかやることは変わらないし」
　鷹森くんがそう言った瞬間チェシャ猫も迎え撃つために走り出した。
「やっぱりそうきますよね――予想通りです！」
　次の瞬間可憐とルナは同時にジャンプし可憐はルナの足にほぼ直線にに蹴りこんだ。
「へ～？」

ルナは鷹森の背後の壁に着地し瞬間高速で折り返した。
（スピードならチェシャ猫よりルナの方が上！）
「今度こそもらったー！」
ルナの蹴りが鷹森くんの顔面に撃ち込まれようとする瞬間チェシャ猫がルナを叩き落とした。

第５話霧の幻影

「え？」
「ありがとうチェシャ猫～」
「え？な、なんでチェシャ猫が２匹も居るんですか!?」
　私は今目の前に立っているチェシャ猫を見ながら叫んだいや叫ばずにはいられなかった。
「ん？チェシャ猫が２匹居たらまずいの？」
「いやいやいや召喚獣は１人体までですよね!?」
「???」
「わ、私変なこと言いました!?」
「いや～何当たり前な事叫んでるのかな～って」
「ぶっ殺しますよ!?」
「まあ種明かしをすると～」
　そう言って鷹森くんが指を鳴らすと私側に居たチェシャ猫が霧になって消えた。
「これは…幻影？」

「正解～僕のチェシャ猫の固有スキルは霧の幻影、霧を発生させて霧がある場所に幻影を作り出すんだ～」
「霧？霧なんて何処にも…」
「まあ分からないよね～まあこれで分かるかな？」
鷹森くんがまた指を鳴らすと今まで何も無かった異能格闘場が霧に覆われてた、霧が急に出現したこともありクラスメイトはガヤガヤしている。
「はぁ…鷹森さんこのスキルは使用許可が降りてないはずですよ？」
「ああ～すみません先生可憐ちゃんを脅かしたくて☆」
「……まあ、今回だけですからね次からは気をつけるように」
「はーいわかりました～」
「ちょっと待ってください！使用許可ってことは霧の幻影は使用制限スキルなんですか？」
「ええ、霧が幻影は教師クラスのスキルですので少なくとも学校では異常事態以外は使用許可がおりませんね」

「あ、あの～チェシャ猫のクラスっていくつでしょうか？」
「私はＳランクと聞いておりますが」
「Ｓランク!?」
「そうそう可憐ちゃんのルナの２つ上だね～」
　鷹森くんは相変わらずニヤニヤしている殴りてぇ…
「まあまあ落ち込まないで～ルナだって十分でしょ？それにレアリティなんて所詮人が付けた飾りみたいなものだし」
　おい最後で最初に言ってること否定してるぞ。
「はい、そこまでです皆さんも十分相手や周りの力を見れたんじゃないでしょうか？この調子で皆で競い合い成長していきましょう」
「「ありがとうございました」」
「……はぁ…」
　完敗だ…レアリティとかスキル以前にまず召喚術士としての格の違いを見せられた、私は今思えば鷹森くんを舐めていたと思うこんな奴には負ける気がしないって良く考えればスキルを使ってくることなんてわかっていたはずだ。
「どうしたの可憐ちゃん？」
「別になんでもないです」

「ははん？完敗だスキルのこと頭から排除してた～ってグジグジしてるでしょ？」
「鷹森くんはエスパーに転職したらどうです？」
「いや～いいや儲からなそうだし」
「さいですか」
「それにしょうがないよ～僕が可憐ちゃんが僕を舐め腐るように仕向けたんだもん」
　はい？
「え？どういうこと？」
「だから最初の黒板消しからウザがられるまでベタベタしたのは計算のうちなんだって」
「……続けて」
「まず召喚術士がこの学校に来る情報を手にれるでしょ？そしてその召喚術士とコンタクトを取って最悪な印象を植え付けるまあ孤立させる手間は省けて助かったよ～あとは実技で舐め腐ってる相手をボコす！僕は勝てて愉悦に浸れる良く「いっぺん死んどけ!!」ぐはっ！」
　鷹森くんの顔面をぶん殴った私は怒り心頭でその場を後にした。

第６話図書室での出会い！

「ほんっとなんなの鷹森のやつ！僕が可憐ちゃんが舐め腐るように仕向けたんだもんってバカみたい！余計にタチ悪いんだっっーの！」

雛沢可憐はキレていた頭に血が昇っているせいで口調が崩れていることも気づいていない、それもあのいけ好かない猫男のせいだ。

「ムカつく！」

～しばらくお待ちください～

「はぁ…図書室行こう」

アイツが図書室来るとは思わないしちょうどいいよね。

「って着いたけど見た感じ人が居ない…っておや？」

そこには１人お人形さんみたいなメガネをかけた少女だけがぽつんと本を読みながら座っていた。

（図書室に居るのは私と少女のみ…え？これは…話しかけろってことかな？）

というわけで話しかけてみまーす。

「ええっと…こんにちは♪」

「ん…」
「……」
「……」
「ああ！これ面白いよね私も好きだよ！」
「そう…」
「あ、あはは…」
あれ？私ってもしかして思った以上にコミュニケーション能力ない？やばい目から汗が出てきた。
すると少女は本の山から1冊の本を私の前に置いた。
「…これが好きならこっちもおすすめ」
「え？あ、ありがとうございます！」
「ん…」
そう言って少女はまた読んでいた本に目を向け読み始めた。
良かった面倒くさがられているわけじゃなさそうだ。
「ええっと…初めまして今日からこの学園で生活する雛沢可憐です！」
そう挨拶をするとこちらに目を向けて来た。
「…緑川藍中等部2年」

「せ、先輩でしたか！すみません馴れ馴れしくしてしまって…」
「気にしてない大丈夫」
「ありがとうございます！」
口数は少ないけど優しい良い先輩みたいだ。
「ここっていつも人居ないんですか？」
「そう…いつも居ない」
「へ～そうなんですね～」
「……」
「……」
「理由…」
「え？」
「理由は聞かないの？」
確かに図書室に人が居ないの珍しいかもしれない
「なんか理由があるんですか？」
「ん…」
そう言って藍先輩は頷いた。
「この図書室では昔女子生徒が自殺した場所…それから怪奇現象が起きるようになっ

た、だから他の生徒は薄気味悪がって来ない」
「ええ!?ここっていわく付きなんですか!?」
「そう…だから来るのは事情を知らない新入生くらい」
確かによく見れば図書室は薄暗く気味悪く感じますね…
「そうなんですか～ま、まあ私は気にしないですがね！」
「私も」
「それにしても「ゴンッ」痛っ!?」
そう言った瞬間一冊の本が可憐の顔面に飛んできてぶつかった。
「これが怪奇現象」
「痛た…なるほど…」
「直に慣れる」
「だといいですね～」
私は涙目になりながら顔を抑えてそう思いました。

第７話　再びヤンキー先輩！

藍先輩と雑談し別れて図書室を出た後廊下を歩いていると見覚えのある人物を見つけました。

「あっ！鬼凛寺せんぱーい！」

「あぁ？ちっ雛沢かよ」

「舌打ち!?酷い！」

「で？何の用だ？くだらないことだったらどつくぞコラ」

「く、下だらなくないですよ～ちょっと気になることがありまして」

「なんだ俺達あってまだ１日経ってないだろなんかあったか？」

「はい！鬼凛寺先輩って１年前花菊学園中等部の代表で異能学園対抗戦に出てなかったですか？」

「……ああ出てたな」

「ですよね！私あれ観客席で見てたんですよ～」

「そうかよ、で？それだけか？」

「ええ～!?他にも反応無いんですか!?見てたのか…照れるな（キラッ）とかサインいるか

い？とか！」
「どんなキャラだよ!?あと声真似似てねえよ!?」
「まあ、そこまでいかなくても準優勝だったんですからなんかないんですか？」
「何もねえよ、スポーツで熱くなるようなタイプでも無えし」
「む～じゃあ鬼凛寺先輩はなんで異能学園に入ったんですか？」
「そんなの決まってるだろスカウトだよスカウト、俺の異能は珍しいみたいでなぜひ手元に置いておきたいんだと」
「ん？先輩の異能ってそんなに珍しかったでしたっけ？」
「…ちっ喋り過ぎた話は終わりだじゃあな」
「あっ待ってくださいよ～」
「待たねえよ」
　鬼凛寺先輩はそう言って振り返らず行ってしまいました。
「ん～」
　鬼凛寺先輩の異能「雷神」は雷系統の中でも上位のスキルだ、しかし雷系統と言った通り雷系はちょくちょく見る異能です、だからスカウトはあの実力から有るとして珍しいは当てはまらないはずなんです。
「どういうことなんでしょう？」

「気になるね～」
「はい…とい言うか消えてくれませんか鷹森くん」
「いきなり酷いな可憐ちゃんは～」
　そう言いつつも鷹森くんはいつも通りヘラヘラ笑っている。
「あの…いつからいました？」
「あっ鬼凛寺せんぱーい♡辺りからだね」
「最初からじゃないですか!?」
「いや～可憐ちゃん先輩に対してもあのキャラでいってるの？軽く引いたんだけど」
「い、いいじゃないですか別に！ほっといてくださいよ！」
「あはは～相変わらず可憐ちゃんは面白いね～」
　な、殴りたい。
「はあ…で、何の用ですか？」
「ん？用が無いと話しかけちゃいけないの？」
「……」
「冗談だよ～可憐ちゃん凄い顔だよ」
　誰のせいだと…!
「まっ冗談はこの位にして可憐ちゃん先生が呼んでたよ～」

「先生がですか？」
　なんでしょう？特に問題は起こしてないはずですが…
「まあ考えるより行ってみないとですね」
「そうだねじゃあ行こうか！」
「え？なんで鷹森くんも？」
「なんでって僕も呼ばれたからだよ？」
「へぇ～」
「まあ良くも悪くも僕達目立っていたからね～」
「不安になること言わないでください」
　そうして私達は職員室に向かうのでした。

第８話　職員室!

「(コンコン) 失礼します雛沢と鷹森です山崎先生は居ますか?」
「はい、ここですよ雛沢さん」
「はい!って貴女は…」
　山崎先生の前には2人先客が居ました。
「えっと…確か黒石和さん?」
「あら? 雛沢さんですか…」
「なんでちょっと嫌そうなんですか!?」
「ちょっとじゃありませんかなりですわ」
「かなり!?」
　私がガビーンとしていると横で女の子がポツリとあっ…これ視界に入ってないやつだとか言ってる気がしますがそれどころじゃありません!
「私黒石和さんになんかしましたか!?」
「何かしたというかされるかもしれないというか…」
「はい?」

「な、なんでもないですわ！兎に角！貴女はもう少し強者としての自覚を持ちなさい！伊達に学年3席じゃないでしょう？」
「わかってますよ…」
「まあまあ可憐ちゃん、真由里ちゃんも別に可憐ちゃんが嫌いだからガミガミ言っているわけじゃないんだよ真由里ちゃんも昔から苦労人でね～」
「鷹森さん？それ以上は言わないでくださいね？そのお口を凍らせますわよ？」
「あはは怖い怖いまあとりあえず先生の話を聞かない？」
　見ると山崎先生はジト目で私達を見ていた。
「話は終わりましたか皆さん？」
「ハイスミマセン」
「失礼しました」
「私完全にとばっちりですよね!?」
　名も知らぬ少女の嘆きはスルーされ先生の話が始まった。
「貴方達は中等部1年の首席～6席ですそんな貴方達に仕事を頼みたいのです」
「先生！首席って誰ですか！」
「荒川さんです」
「「誰？」」

「私ですよ!!さすがに酷くないですか!?」
そう言う少女をみんなで見た。
第一印象は。
「「普通だ」」
「そんなの私が１番わかってますよ!?」
おお～お手本のようなツッコミ。
「コホン…彼女は確かに見た目は普通ですが一応異能、頭脳含め首席として遜色のない人物ですよ」
「一応!?一応って言いましたか先生!?」
いや～人は見た目に寄らないんですね。
「先生～仕事ってなんですか?」
鷹森君が話を戻しました。
「はい、実は貴方々の能力を買い教師が動けない事件を解決して欲しいのです」
「事件?というかなんで２、３年じゃなくて１年の僕達なの?」
それは当然の疑問です。
「はい、事件と言っても１年フロアで起きる些細な問題を頼みたいのですそして貴方々１年に頼んだ理由は…」

「…なるほど自分達の問題は自分達で解決しろってことですわね」
「…黒石和さんその通りですこの学園に入る時に聞いたと思いますがこの学園では他の学校と違って学生一人一人に基本的な『自由』が与えられますそこに教師の介入は入りませんつまり――自分の身は自分で守るしかないのです」
　ああ～言ってましたね貴方達はこの学園では自由だ！って。
「ん～先生！じゃあなんで僕達に他の生徒の不始末を処理するように言うんですか？その程度で潰れるなら勝手に潰しておけばいいじゃないですか」
　おっと鷹森くんぶっちゃけましたね…まあ言いたいことは分かりますが…
「簡単です自由と言ってもある程度の秩序は必要です、ですが形だけの規制になんの意味もありませんそこで」
「ああ～わかりました小規模の隠密組織を作って学園いや自分たちの学年の平和を守らせようってことですね！そして表だって作らない理由は悪意を持った人間から標的にさせないように！」
「そうです流石雛沢さんですね」
「よし！」
「やっと3席らしい片鱗を出しましたわね」
　黒石和さんはやっとかみたいな目で見てきますが気にしません！

「成績を表だって出さない理由はこのためでしたか…」
　荒川さんも頷いてる。
「そういえば僕達がこれやるメリットありますか？危険ももしかしたらあるかもしれないんですよね？」
　鷹森くん…すごい期待した目をしている…
「はい、まず成績や進学に内申点がつきますし学園の予算も申請すれば使えますし事件の難易度によって特別給与が出ます。」
「先生！やらせてください」
　あっ鷹森くんお金に釣られたね…
「まあ、わたくし達がやらなければ別の人がやることになりそうですしそれならわたくしがやった方が確実ですわよね」
　黒石和さんもやる気みたいですね。
「えっと～わ、私もやります！元々生徒会や風紀員とかに憧れてましたし」
　荒川さん多分これは生徒会や風紀員とは違うと思うよ？
「私もやります！ここでやらなければ可憐の名が泣きますからね！」
　もちろん私もやりますよ！
「そういえば第６席ってことは２人居ませんね？」

「簡単ですわ2人はサポート異能クラスなんですよね山崎先生？」
「正解です」
「ああ～なるほど…」
サポート異能クラスとはサポート能力に特化した戦いサポート育成クラスのことです。
「まあサポート異能は1人の時戦えないですからね」
まあ中には体術や身体強化で強い人は居ますが稀ですからね。
「先生～話は終わりですか？」
「はい、もう帰って大丈夫ですよ」
「「「では失礼しました」」」
そうして私たちは職員室を後にしました。

第９話隠し部屋と上級生達

「そういえば皆さん」
「なんですか黒石和さん？」
　黒石和さんの言葉に荒川さんが反応しました。
「改めて皆さんの異能の確認と連携の練習をした方がいいと思いますがどうでしょう？」
「確かに大事ですね！やりましょやりましょ！」
「僕も賛成～どこでやる？あまり目立たないところですやりたいよね～」
「そういうと思ってましたよ」
「あっ山崎先生！」
　そこに現れたのはさっきまで話していた山崎先生です。
「先程話すのを忘れていましたが地下に隠密組織用の異能戦闘の練習場がありますそこで練習してください」
「おお～ありがとうございます！」
「そこまで案内します着いてきてくださいね」

そう言って山崎先生は背を向けて歩き始めました私達はそれに着いていきます。
「山崎先生」
「はい、なんですか?」
「その練習場にはやっぱり他の隠密組織の人もいるんですよね?」
「そうですね今の時間でしたら誰かしらいるかもしれませんね」
「ほへ〜」
そして歩いていると暗く何も無い廊下を過ぎ壁の前に着きました。
「あの…ここですか」
「はい、ここです」
そういった山崎先生は壁の真ん中に手をかざしましたすると。
スズズッと壁にヒビが入り開きました。
「おお!これは俗に言う隠し扉というやつですか!?」
私は大はしゃぎです!…私だけですけど…
「足元気をつけてくださいね」
そう言って山崎先生は階段を降りていきます、それに黒石和さん、荒川さん、鷹森くん、私の順で着いていきます。
「暗いですね…」

「足元には明かりがついているね～まあ薄暗いからなんのためについてるの？って感じだけど」
「ああ、それですか学園長の趣味です」
「趣味!?」
「いや…趣味より渡る人のこと考えてくださいよ…」
　黒石和さんは呆れているみたいです。
「まあ、慣れれば目を瞑っていても降りれるようになりますから大丈夫ですよ」
「大丈夫…大丈夫ですか？」
「着きましたよ」
　見ると目の前に扉があります、それを山崎先生が開けると。
「あ、山崎先生おっすおっす」
「へ～新しいメンバーですかこんにちは皆さん」
　そこには４人の上級生達が居ましたそしてやっぱり
「鬼凛寺先輩!!」
「……雛沢…お前が成績上位者だと…!?」
「ええ!?私が成績上位者だというのがそんなに意外ですか!?私からしたら先輩が上位者なのが意外なんですが！」

「喧嘩売ってるのか？人を見た目で判断するな」
「その言葉そのままお返しします！」
「俺は見た目じゃなくお前のバカな言葉遣いで判断しているんだよ！」
「酷い!?」
「涼この子と知り合いかい？」
　いかにも強者ですみたいな雰囲気を出している女子生徒が鬼凛寺先輩に声をかけました、先輩！言っちゃってください！
「あ？…ああなんか始業式前に絡んできてな」
「なるほどこの年で不良か…」
「違いますよ～運命を感じたので話しかけただけです～」
「え？可憐ちゃん僕に運命とかイカれてるんじゃないの？って言わなかったけ？」
　そんな鷹森くんをスルーする私。
「そういえば鬼凛寺先輩がいるってことは皆さん中等部３年生なんですよね？中等部２年生の皆さんはまだ来てないんですか？」
「ああ、２年はもうすぐ来ると思うが…」
「彼らあまりやる気がないんだよね～」
　明るい感じの爽やかイケメン男子生徒がやれやれと首を振りました。

「そうなんですね～」
「まあ～そういう人もいるかもですね～」
「雛沢さんと鷹森くん？上級生前でその気の抜けた話し方はやめてくださいませんか？」
「あはは！まあ大丈夫だよ黒石和くん堅苦しい感じは私も好きじゃないんだ気楽にいこうじゃないか！」
「そうですか？まあ皆様が大丈夫でしたらわたくしも大丈夫ですが…」
「ありがとうございます！先輩！真由里ちゃんってばいつも堅苦しくてさ～」
「調子に乗らないでください鷹森くん？」
「仲が良さそうで何よりだ！」
「別に仲は良くないですわ!?」
「皆さん仲が良さそうで良かったです」
　そこへ山崎先生が声をかけました。
「１年生皆さんここに来た理由はお分かりですよね？」
「はいはーい異能確認と連携練習ですよね！」
「そうですとりあえず１年生皆さんには３年生に自分の異能と基本スキルを見せてください」

「「「わかりました！」」」
「の前に自己紹介をよろしくお願いします」
あっ忘れていた…周りを見ると先輩達も忘れていたみたいだ。
「えっと私雛沢可憐です！」
「私は黒石和真由里です皆様よろしくお願いします」
「鷹森歩だよ～よろしく～」
「荒川千乃です…よろしくね」
「私達も自己紹介しようか私は羽山輪廻よろしく」
「阪口圭吾っすよろしく！」
「綾坂彩乃ですよろしくね1年生さん？」
「鬼凛寺涼だ」
それぞれの挨拶が終わり羽山先輩が仕切り始めた。
「さて…まずは荒川くん圭吾相手をしろ」
「はいはーいよろしくッスね荒川ちゃん」
「はい！よろしくお願いします！」
上級生阪口圭吾先輩と荒川さんの練習試合が開始した。

第１０話確認と上級生の力①

「さーて始まりました阪口先輩対荒川ちゃんの練習試合荒川ちゃんはどんな戦いを見せてくれるのでしょうかちなみに阪口先輩の異能は――!!」
「…鷹森くんうるさいですわ」
「あはは…」
　相変わらずウザイ鷹森くんはスルーして私は目の前の試合に集中します。
「先輩、少しも気を抜かない方がいいですよ?気を抜いた瞬間終わりますから」
「へ～言うじゃないっすか――って!?」
　気がついたら阪口先輩の足元周辺が凍っていた。
「え?いつの間に!?」
「あれは真由里ちゃんと同じ氷系統?にしては…」
「いえ…確か荒川さんの能力は――」
「阪口先輩ギブアップしますか?」
「気がついたら足が凍っている…氷系統にしては妙ッスね…」

「分かりますか？これはフィールド変化の能力『天変地異』です」

「なるほど…これまた珍しい能力を…」
「フィールド変化…ですか？」
「これは僕も知らないな～」
「フィールド変化はフィールドを変化そして操り戦いを進める能力ですちなみに知らない人が多い異能として異能マニア達では有名ですわね」
「つまりレア能力なんですね！」
「ええ…レアですわ１０年に１人しか現れないくらいには」
「１０年!?」
「１０年ですわ、さらに使うにはそれなりの頭脳が必要ですから使いこなす人となれば２００年に１人と言われてますわね」
「すごいんですね！」
「さて荒川さんは学年主席でフィールド変化の使い手ですこれが表すのは――荒川さんは使いこなせる人間ですわね」
「なるほど…超レアスキルっすか…」
「それだけじゃないですよフィールド変化は予備動作もなく使いこなせたら一瞬で相手

を倒せるスキルです先輩このままだと全身氷漬けになりますよ」
荒川さんが言う通りに足から氷が阪口先輩に迫ってきてる。
「なら、俺も本気出さないとっすね！」
そういって指を鳴らす阪口先輩すると地面から植物が伸びてきて氷を粉砕した。
「!?」
「あれは…植物ですか？」
「そうです圭吾くんの能力は植物系統の能力なんですよ」
「へ～しかしあの量の植物を操るって相当な使い手だね」
そうですどんな能力も同じ系統でも強い弱いがあります強い人は努力もありますが完成した能力の５０％は才能と言われてます
「しかしあれは…」
「どうしたんですか黒石和さん？」
「フィールド変化が変化できるフィールドは１種類だけじゃないんですよ」

植物は入り乱れ１人の巨人の形を作った。
「これが俺の能力『緑の巨人』っすよ」
阪口先輩は緑の巨人に立ちニカッと笑いました。

「なるほど…しかし植物なら燃やせばいいですよね」
　そういうと一瞬でフィールドが灼熱の大地に変わった。
「ええ!?炎も出せるんっすか!?」
　そして炎は植物できた緑の巨人は燃え上がった。
「あっっあっっ!?」
　そう言って阪口先輩は巨人から落っこちました。
「くーー!やけだやれギガンテス!」
　その合図で緑の巨人ギガンテスは燃え上がりながら拳を荒川さんに振るう。
「甘いです!」
　瞬間フィールドが変わり高い岩だらけの岩石フィールドに変わった、その拳は荒川さんの目の前の岩に阻まれ防がれた。
「終わりです阪口先輩」
　着地した阪口先輩の隣で焼けたギガンテスは力無く崩れ落ちていた。
「緑の巨人は崩れて貴方の周りには何も無いあとは焼けるのを待つだけですね」
　フィールドはもう灼熱の大地に変わっている。
「さあ阪口先輩サレンダーを!」
「サレンダー?それは貴女の口から聞きたいッスね荒川ちゃん?」

「え？いやいやこれ私の勝ちですよね!?」
「いや～俺の勝ちっすよ？何せもう出来上がってるすから」
「なんですって？」
　次の瞬間植物が荒川さんに絡みつき持ち上げた。
「なっ!?」
　そして能力『天変地異』は解除された。
「やっぱりっすか荒川ちゃん、荒川ちゃんの能力は足が地面についてないと発動しない」
「な、なんで植物がここまで!?」
「あれ？やっぱり計算外だったかな？」
「当たり前ですよ！」
「俺の能力は俺の傍からしか発動できない確かにそうっす普通そうっすからね？じゃあ何故そこにあるのか簡単っすそこまで伸ばせばいいんすよ」
「…だけどこのフィールドは炎のフィールド…」
「だから水分を沢山含んだ燃えにくい植物を使ったんっすよ」
「え？」
「あれ？言わなかったすか？俺の能力緑の巨人は使う植物を選べるんっすよ」
「な、何故…」

「何故使わなかったのかっすか…だってそうした方が荒川ちゃん油断してくれるじゃないっすか？」

「阪口先輩…めちゃくちゃ嬉しそうな顔してますね」
「まあ～作戦が決まったから嬉しいんだと思うよ～うん」
「…私の負けです」
　ついに荒川さんは負けを認めた。
「勝者、阪口圭吾」